

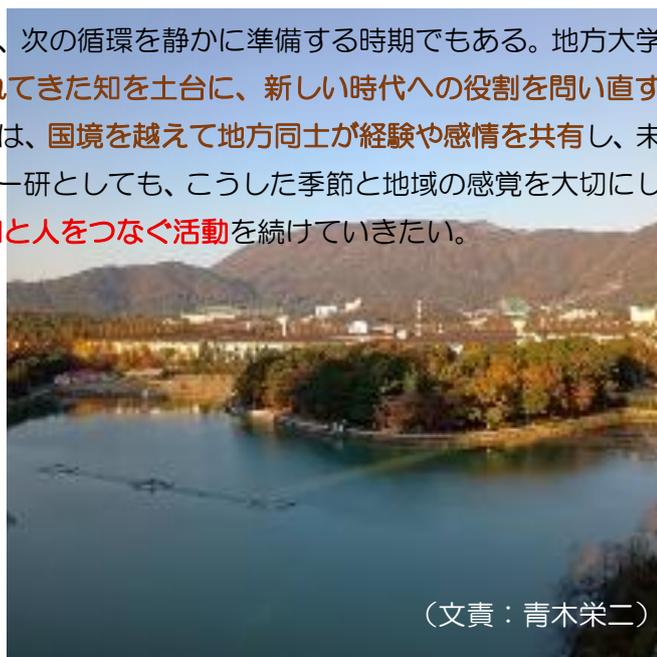
2025年11月ハイパーカレンダーレポート

季節とともに考える地方大学の未来～韓日国際セミナーに出席して

11月中旬、日本でも韓国でも、山々は静かに色づき、街の時間の流れが少しだけ緩やかになる。赤や黄色に染まる木々は、観光資源である以前に、その土地で暮らす人々の記憶や感情と深く結びついた存在だ。日本の地方における紅葉は、しばしば「移ろい」や「余白」を感じさせる季節として語られる。一方、韓国の地方でも秋は、家族や地域が集い、**過去と未来を語り直す時間**として大切にされている。表現や文化の違いはあっても、自然の変化を通して、自分たちの立ち位置や次の世代を思う感覚は、日韓の地方に共通しているように感じられる。こうした季節感の共有は、単なる情緒ではなく、**地域社会が変化と向き合うための思考の土壌**でもある。11月20日、韓国・慶尚南道において開催された「地方大学の競争力強化を韓日国際セミナー」は、まさにそのような季節の中で行われた。

本セミナーは、2025年8月にMOUを締結した慶南研究院が、慶尚南道の地方課題の一つである「地方大学の活性化」をテーマに企画したものであり、日本と韓国の研究者、大学関係者、行政関係者が集う国際的な対話の場となった。ハイパーネットワーク社会研究所からは、「地方大学と共に創る産官学民エコシステム」をテーマに講演を行い、地方大学を地域社会の「知の中核」と捉えた連携モデルを紹介した。人口減少や若者流出といった日韓共通の課題に対し、大学・研究機関・自治体・企業・市民が連動することで、地域から新たな価値を生み出していく可能性を示した。また、立命館アジア太平洋大学（APU）総田芳憲教授からは、地方に立地しながら世界とつながる国際大学としてのAPUの実践が紹介された。多文化共生型キャンパス、国際学生と地域社会の関係性、そして人材育成の成果は、地方大学が持ちうる未来像を具体的に描き出すものだった。

紅葉の季節は、過去を振り返りながら、次の循環を静かに準備する時期でもある。地方大学もまた、**地域の記憶とともに蓄積されてきた知を土台に、新しい時代への役割を問い直す局面**にある。今回の韓日国際セミナーは、**国境を越えて地方同士が経験や感情を共有し、未来を構想する第一歩**となった。ハイパー研としても、こうした季節と地域の感覚を大切にしながら、今後も**「地方から世界へ」知と人をつなぐ活動**を続けていきたい。



（文責：青木栄二）